

現代ギリシア語とアルバニア語の 関係節における重叙表現の比較

井 浦 伊 知 郎

現代ギリシア語で「～するところの」という意味の関係代名詞 *πού* が関係節中で直接目的語となる時、弱形人称代名詞をその中に含む場合がある。

(1) *ὁ φίλος πού εἶδα* / (2) *ὁ φίλος πού τὸν εἶδα* (関本 1968 P.81)

「私が会った友人」

(3) *Αὐτὸς ἦταν ἓνα συμπαθητικὸ γεροντάκι πού τὸν ἀγαποῦσαν ὅλοι στὸ χωριό.* (関本 1976 P.254)

「彼は村の全ての者が愛した好ましい老人であった」

特に *πού* が間接目的語や所有を示す属格として用いられる時、この重叙¹⁾は義務的である。

(4) *...ἡ ἐφημερίδα πού τῆς εἶχε δώσει τὸ ὄνομα "τὸ καθημερινὸ λίγο ἀπ' ὄλα".* (関本 1976 P.254)

「(彼女が) それに『何でもちよっぴり毎日新聞』という名を与えた新聞」

(5) *τὸ παιδί πού εἶδα τῆ μητέρα του* (関本 1968 P.81)

「その母親に私が会った所の子供」

同様の意味で用いられる *ὁ ὁποῖος* については、特に重叙は見られない様である。

(6) *ὁ φίλος μὲ τὸν ὁποῖον εἶμουνα* (関本 1968 P.81)

「私が一緒にいた友人」

一方アルバニア語²³の関係代名詞にも「～するところの」という意味で që と i cili が用いられる。që は不変化であり、関係節中で主語又は直接目的語としての文法的役割を持つ場合にのみ用いられる。人称代名詞の重叙は義務的でない。

(7)...njerëzit ...mësuan të bënin vegla
man-df.pl.nom. learn-aor.pl.3 make-subj.impf.pl.3 tool-indf.pl.acc.

pune, që vazhdimisht i përmirësonin.
work-indf.sg.abl. relat. continuously it-pl.acc. improve-impf.pl.3
(Minga 1988 P.3)

「人間は…仕事の道具を作る事を覚え、それを絶えず改良していた」

(8)Populli ynë, ...realizoi me nder
people-df.sg.nom. our realize-aor.sg.3 with respect-indf.sg.acc.

edhe detyrat që caktoi Kongresi
and task-df.pl.acc. relat. determine-aor.sg.3 congress-df.sg.nom.

i 8-të i PPSH.

eighth PLA-sg.gen. (Minga 1988 P.138)

「我が人民は、…アルバニア労働党（PPSH）第8回党大会が決定した任務を誇りを持って実現させた」

(9)...ato pak prodhime që siguronin
these a little produce-indf.pl.acc. relat. ensure-impf.pl.3

fshatarët e që detyroheshin t'i
peasant-df.pl.nom. and relat. compel-pas.impf.pl.3 it-pl.acc.

shisnin për të larë taksat...
sell-subj.impf.pl.3 to pay off tax-df.pl.acc. (Minga 1988 P.66)

「農民達が確保していたのに、税金を清算する為販売を義務付けられていた（その）僅かな作物を…」

例文(9)には先行詞 *ato pak prodhime* の関係節が二つあるが、*që siguro-nin fshatarët* では重叙せず、主語を省略した *që detyroheshin t'i shis-nin për të larë taksat* で弱形人称代名詞 *i* による重叙を生じている。

これに対して *i cili* は性・数・格によって変化し（性・数は先行詞、格は関係節中の文法的役割に従う）、関係節中の直接目的語（対格）又は間接目的語（与格）となる場合は常に重叙を生じる。

(10)...*erdhi një mbret i huaj, të cilin e*
come-aor.sg.3 one monarch-indf.sg.nom. foreign relat. it-sg.acc.
m.sg.acc.
kishin caktuar shtetet e mëdha kapitaliste.
designate-pastpf.pl.3 state-df.pl.nom. big capitalist
 (Minga 1988 P.58)

「…資本主義大国が決めた外国の君主がやって来た」

(11)...*gëzimi i fshatarëve të Gorresë së Lushnjës,*
pleasure-df.sg.nom. peasant-df.pl.gen. Gorre of Lushnjë-df.sg.gen.
të cilëve ua dha shkresën
relat. it-pl.dat.+it-sg.acc. give-aor.sg.3 document-df.sg.acc.
m.pl.dat.
e zotërim të tokës vetë shoku Enver Hoxha.
ownership-df.sg.gen. land-df.sg.gen. -self comrade-df.sg.nom.
 (Minga 1988 P.111)

「エンヴェル・ホジャ同志自身によって土地所有証書を渡されたルシニャ・ブレの農民達の喜びは…」

πού における重叙の理由について「関係代名詞 *πού* は不変化詞である為、先行詞の性・数・格はそれだけでは不分明であり、これをはっきりさせるという積極的な必要性からも人称代名詞…が重叙されるからである（関本 1976 P.254）」という指摘がある。つまり、性・数・格の変化によって先行詞との関係や関係節中の文法的役割が明確に示される *ὁ ὄνοτος* では、敢えて重叙する必要がないといえる²³。

この事をアルバニア語にあてはめてみると、*që* の関係節中の文法的役割が主語と直接目的語の場合に制限されるのは、不変化詞故に文法的役割が不分明

明であるからだといえよう。しかし、不変化詞 që の重叙は義務的ではなく、むしろ性・数・格によって変化する i cili の重叙が義務的である。この点でアルバニア語と現代ギリシア語とでは様子が異なっている。

註

1) この様に、目的語(句)と性・数・格・人称において一致する(即ち『同格』の)弱形人称代名詞が同文中に現れる現象は、ドイツ語では Verdoppelung、英語では reduplication や doubling、日本語では「二重化」「重複」「繰り返し」等研究者によって呼び方が一致していない。ここでは、現代ギリシア語の先行研究(関本 1976)に従い「重叙」で統一する。

2) アルバニア語に於ける重叙表現の典型は次の様なものである。

Dollapin e rregulloj unë.
closet-df.sg.acc. it-sg.acc. arrange-sg.1 I-sg.nom.

(直野 1989 P.43)

「タンスは私が整理するわ」

3) ここで考えているのは関係節の制限用法である。非制限用法の場合には状況が異なるかも知れないが、ここでは言及しない。

引用文献

Buchholz, Oda & Fiedler, Wilfried (1987) Albanische Grammatik (VEB Verlag Enzyklopädie, Leipzig)

Minga, Elsa (ed.) (1988) Histori e Shqipërisë 4 (Stëpia Botuese e Librit Shkollor, Tiranë)

直野敦 (1989) 『アルバニア語入門』 (大学書林)

関本至 (1968) 『現代ギリシア語文法』 (泉屋書店)

関本至 (1976) 「現代ギリシア語における重叙表現」 『広島大学文学部紀要』 35, 250-259